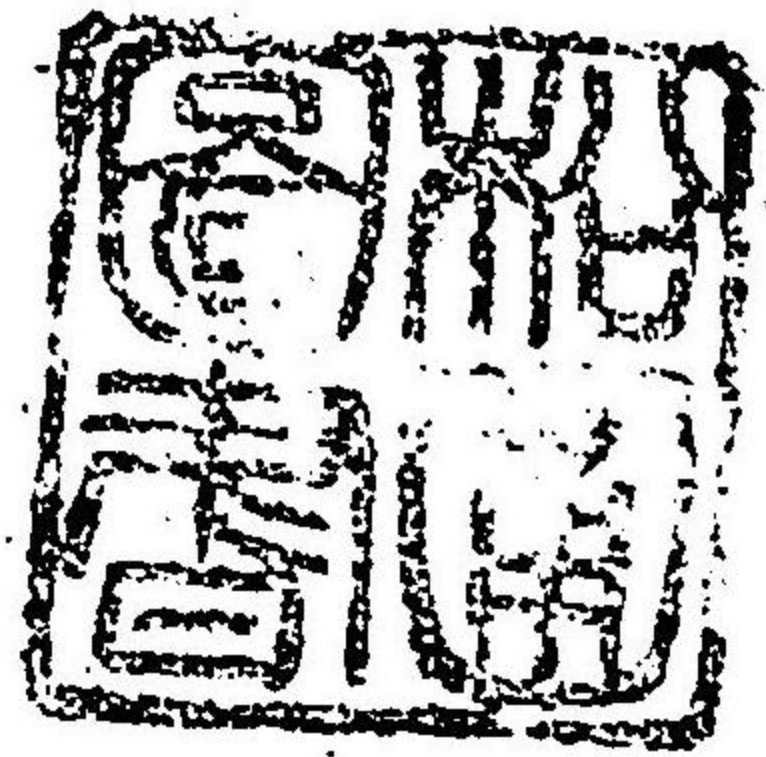


奥羽觀蹟聞老志

五

291.2
Sa5310

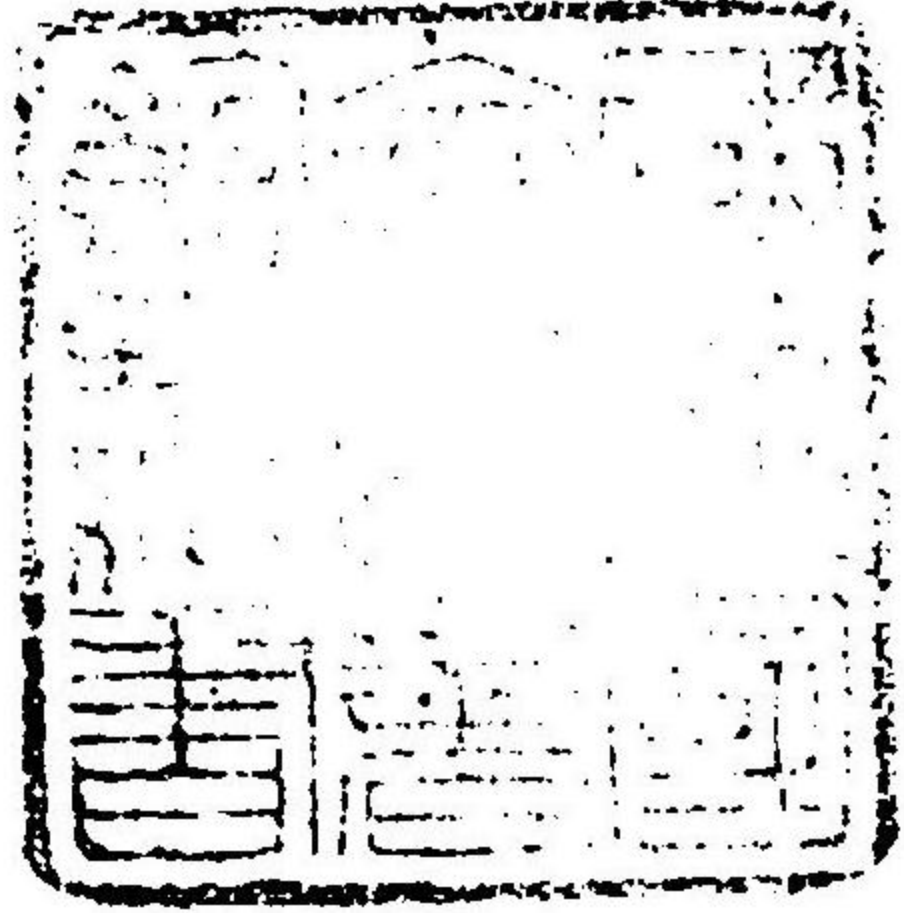


奥羽觀跡聞老志卷之五

名取郡

仙臺 佐久間義和著

四十八代稱德帝天平神護元年十二月辛亥陸
 奥國正六位上名取公龍麻呂賜姓名取朝臣
 同神護景雲三年三月辛巳陸奥國名取郡人外
 正七位下吉禰侯部老賀美郡人外正七位下吉
 侯部大成九人賜上毛野名取朝臣
 五十代桓武帝延曆四年四月辛未中納言從三
 位兼春宮大夫陸奥按察鎮守將軍大伴宿禰家



348430

持等言名取以南一十郡十四作一郡僻在山海去塞懸遠屬有徵發不會機急由是權置多賀階上二郡募集百姓足人兵於國府設防禦於東西誠是備預不虞推鋒萬里者也但以徒有聞說之名未任統領之人百姓顧望無所係心望請建為真郡備置官員然則民知統攝之歸賊絕窺窬之望許之

按多賀階上自是前權置之依家持之請斯時始為真郡者可視焉家持之奏請可謂急先務專守禦之器也壺碑之途程蓋起乎此時而勒

五十六代清和帝貞觀十一年三月庚午名取郡大領外正六位上刑坂宿禰本繼授借外從五位下風土記曰陸奥國名取郡名浦四湊三名山九岡七温泉三宮祠七寺院五

又曰名取郡東限青葉川西限岩沼川南限松賀湊北限若狹山貢松栢檜桐栗梨楊梅紅花熊鹿猪狐之革猿兔之膽隼鷹牧馬鶴鶴鴈鷓鴣鷓鷲鷺鷥鮭鮎及海鮮等

按青葉岩沼二川松賀湊若狹山未詳其地焉今雖岩沼村落在非稱川者但青葉川者指城

下廣湍川歟河畔山頭乃青葉山也仍稱之青
葉川歟牧馬亦不傳其地焉鱒鮭鮎鮮今猶多
特鮎魚肥大美味異于佗梁之同郡人來田河
流

神名帳曰名取郡二座並小 多加神社 佐具
叡神社

風土記曰多賀神社圭田五十八束二字田所祭
伊弉諾尊也雄畧二年始奉圭田行神禮式祭
神名秘書說載之官城郡多賀下

又曰佐具叡神社圭田五十束三字田又假粟猷

半毛所祭高皇產靈尊也孝德天皇二年丙午三
月始奉圭田行神禮有神家巫戶等

按兩社今失其地焉元祿元年戊辰依命巡行
于名取郡而問勝迹笠島村中有民家曰之北
野宅有小祠曰實方墓或曰作衛臣是乃往時
佐具叡神社也鄉人誤其音且以為昔人墓也
仍今荒廢州人渾無知之者可勝歎哉

又曰名取郡公穀七百九十二束假粟六百七十
三九其貢同前鄉外猷白糸白綿桑麻等
あとり此こほり 源 重之

あたなりあとりれこほりにれりあるは下よ
りせくることはあふぬり

茂嶺^{モカ}城址

在根岸村相傳粟野大膳者往時領名取北邑三
十三郷居此城也去仙臺治府已可一里沮廣湍
河流而蒼翠萬株峯巒溪淵頗多岑鬱蒙密仍稱
之茂嶺先太守綱村君建寺號兩足山大年寺且
夫呼北曰般若峯號南曰善那嶺沒後葬于此山
中

北目城址 一作喜多目

在郡山村是亦大膳故館也往年黃門君在斯城
後俾家臣屋代勘解由居焉往時古杉今猶存虬
枝鶴骨甚屈蟠鄉俗曰北目古杉
此地產好瓜粉瓢玉瓣大異于侬方也古城內外
多種之仍載古詩一律以賞之可併按也

夏桂洲

蒼毳引蔓翠交加性羨青門處士家帶露摘來珠
有淚揮刀剖破玉無瑕寒膏細嚼清肌骨甘液新
嘗沁齒牙尚憶滕壘曾遺母至今千載有人誇
慶長五年秋北越豪將長尾景勝令家臣直江山

城率兵攻出羽守義光朝臣于最上請援兵于我
黃門君此時黃門君在此城以伊達上野介政景
將三百騎為前鋒津田豐前為次軍佐々布淡路
為軍監其佗國分士臣白石縫殿助中島半七北
目左兵衛矢田善七郎鶴貝治部伊藤彦右衛門
萱場式部青木又七郎朴澤藏人遠藤出羽鄉六
外記支倉紀伊武勇拔群鄉六又藏青木掃部馬
場右衛門青木勘三郎八乙女與吉佐々布五郎
右衛門二瓶又七郎鄉六孫六小野雅樂允同彌
七郎古内主殿堀江摠吉同雅樂允同源兵衛同

藤四郎丹野縫殿介新妻備前伊藤將監同摠左
衛門練生川源十郎同源左衛門小石縫殿介同
彦右衛門二瓶甚平本郷出雲同九郎右衛門佐
藤和泉早川久藏關半内堀江下野針生助右衛
門蛇躰彌七大福彌三郎高彌七大友美濃同讚
岐馬場清右衛門霞野目二郎兵衛上目左馬介
愛子外記父子等相從高清水長門大立目四郎
小國駿河中目彌五郎矢田豐前松井藏人佐野
治部河東田右馬介小關甚内二瓶右近湯村加
賀久水右馬介青木木工介落合孫右衛門青木

摠右衛門落合莊藏鈴木主計等亦在此隊焉三陣乃以名取北三十三鄉兵並班日太郎左衛門父子大條薩摩成田左馬介後藤五郎左衛門四郎丸藤兵衛小島次兵衛等率其兵四陣乃名取以南三十三鄉兵大嶺式部司之五陣乃保土原江南武山修理同彌藏等也以遠藤但馬石川彌平爲游騎十月朔會北越主將大石常陸于長谷堂而戰戶神山血戰頗甚死傷互多常陸戰不利喪七百餘騎殘兵纔九十騎山城軍盡敗走還于米澤我主將堀江下野馬場清右衛門霞野日二

郎兵衛止目左馬介四郎丸藤兵衛小島摠兵衛支倉紀伊咸戰死武山彌藏青木勘三郎兄弟有戰功各班師至于國見嶺於是黃門君問軍議于但馬彌平但馬對曰臣自少壯屢力戰未會如此役之強北燕之兵勢不勝侵易焉自是其間及彌平對曰夫軍之有勝敗雖固依時運實出謀略之疎密主將之勇億士卒之強弱豈北越之兵惟精銳哉但馬平日以勇敢而負焉如今何奚有此言矣想夫彼武毅勇敢每々建勳于弱兵之間而未敢會於強敵而致其勝敗者乎黃門君稱但馬功

而優彌平カ對ナ見ニ松岡氏軍記

石川彌平慷慨之士也平日以勇武自負焉仍通國與小田部大學並稱曰不屈之彌平乘入之大學凡信許於人也如此兩氏有家紋旌旗以赤黑琵琶而分其色敵兵望之每々乃言黑琵琶彌平赤琵琶大學襲來豈敢當之乎盡敗走而如崩角

名取サト鄉義氏釋說作名虎里利羅音相通故誤之

前田橋西有館址曰前田館門前設調馬路北西有湟址佐々木勘解由者舊館也郭西有伊豆神

社相傳往昔義氏者遇讒而配當國置之石獄其獄址今猶存焉配流已三年遇赦歸主人竭力而能遇感厚意臨別改氏號與實名而稱柿沼忠義後孫降民間往時刺史牧伯等所與之印璽花押傳在家

野史曰中津川義氏筑紫豐前人也花山朝爲衛士而侍禁闈已三載鄉國夫人禱平安于宇佐神國司某遇之途寫情寄艷書不報怨之甚納諧愬於大炊大納言經春帝信而不疑竄義氏於奥州名虎里伯父高倉宮之采地也別時令家臣湯原

滕太光好告鄉里夫人不堪悲痛抱幼兒松若赴
奧州光好及女侍冷泉從焉棹舟于赤間關不幸
值光好卒自是顛沛至于播州室津宿海賊蟻坂
善太夫家國司歸自京師聞之途搜索已急善太
夫亦欲幸寓止告之旅館而德之其婦乃光好姊
明月者也流落于此家主未知我主君見夫之無
狀心潛哀之密告亡之夫人語鄉里婦大驚而導
之避急難國司怒責殺名月夫人走至獄囚與市
門是亦海賊也忽發哀心愛護頗厚善太夫圍與
市舍主夫射而殪長子荒五郎十八歲武勇絕人

力戰殺力人赤間石介太郎者國司怖敗走與市
送行夫人赴若狹宿婆子家見夫人艷容心喜得
利俾其甥山三郎者放舟而載夫人偽赴奧州焉
自是棹越中引冷泉而歸家冷泉不耐悲憤抱幼
君而泣老婆怒投兒干沙上有鵬鵠搏兒騰空奮
翼去後賣冷泉于駿州吹上鹽屋次郎者以煮鹽
也夫人益流落婢于奧州名虎文田四郎高綱者
義氏在此館一日招義氏于浴室置酒開宴以容
色優艷而出其婢勸酒固未知其婦人寵異之餘
情問鄉里始知其夫人俱相喜摻手而嗚咽話其

艱難_ニ後依_テ高倉之愁訴_ニ而遇_レ赦歸洛路經_ニ吹上海濱_ニ冷泉出_テ迎_テ述_フ其狀物色得_ニ松若干民間謂_フ向_ニ某搏_ニ鵬鶚_ニ去_レ有_ニ老翁急_ニ追_レ之鶚棄_レ某去_レ翁撫育有_レ年矣父母俱_ニ喜奏_ニ之朝罪_ニ老婆及_レ山三郎賞_ニ獄囚與市_ニ舉_ニ荒五郎賜_ニ采地_ニ奉勅_ニ以討_ニ國司_ニ報_ニ舊讐_ニ云

按_ニ野史說與_ニ鄉人所傳不同_ニ文田四郎高綱者以_ニ實名考_レ之則是亦佐々木支流乎其地今日_ニ前田橋西宅_ニ後孫雖降_ニ民間保_ニ舊館址_ニ而不失_ニ其地_ニ可謂_ニ厚矣且藏_ニ古文書五篇_ニ曰天文七年戊戌六月廿七日景宗名取郡在家柿沼七郎

年貢免許書一篇同十三年甲辰七月十三日守屋彦十郎爭田三段與_ニ柿沼源二郎_ニ書一篇同年七月廿四日守屋彦十郎爭田中依_ニ柿沼部屋太郎愁訴_ニ與_ニ三百刈_ニ書一篇同十五年丙午十二月十五日名取前田湟內_ニ年貢_ニ文_ニ與_ニ柿沼部屋太郎九_ニ書一篇_ニ合而四篇_ニ同二十二年癸丑十二月十四日達摩九同所在家與_ニ柿沼源二郎_ニ書一篇或稱_ニ景宗_ニ或_ニ書_ニ達摩九_ニ未_ニ詳_ニ何人_ニ天文百六代後奈良院年號花山帝乃六十五代朝也

澄光法親王

あるてとふ人はありを戀すてふ名とりの
さぞとそよとあなまな

夫木集里部あどりの里陸奥寄里戀前大僧
正終覺と有

名取川

水源有二一則出自同郡二道清泉嶽經村落而
東流至閑上村而入于海一則出自吾妻岳下行
澤而合于野尻邑其河流過中田驛北仍曰中田
川夏秋之交設魚梁入數罟以捕細鱗漁鮭魚又

世稱埋木灰者燒河中沈木用之其色紫赤於歌
詠亦賞吟之者多

按閑字不見字書俗間用來而取水波激蕩之
狀然則以港字而爲之乎港乃水分派也又云
水中行舟道或爲港洞開道也

風土記曰名取川貢鱒鮭鯉等又出怪石木材奉
官家

按今河中不出鯉木材者乃沈木也

東史曰文治五年己酉藤泰衡築壘于刈田郡引
柵於名取廣瀨兩河流者乃其一也

古今戀二

讀人志

名をり川瀬々、此埋木あらそればいりにせむ
とゝあひあそめむ

同

忠岑

陸奥にありといふあさきをり川うき名とり
てはをるこりけり

あき名立ける人のもとにつかはしける

金葉戀上

前齋宮内侍

淺まゑや逢瀬も志々名取川まゝきあいは
まもらそへ志やは

源 重之

なとり河梁瀬の浪ふさはをかり紅葉やいと
よりにてせむらん

按重之、奥州國司想夫任國之際所詠此地乎
河上架魚梁而捕鮭魚及鮎魚也考其出處于
此歌則自來者已久矣

攝政太政大臣家歌合よ又侍れる

同戀三

寂蓮法師

有をてもあはぬさめとの名とり川をちよ
はでね瀬の埋木

千五百番歌合に

同

攝政太政大臣

なりよしよいまはたねな名とり河津の
埋木をちはてぬとも

續後撰春下

定家朝臣

名取川春の日數はあはれはれと花にぞとつむ
せいの埋木

按沈木之没于花流實能形象暮春之狀古來
遺綺言于此河者多然重之之於紅葉定家之
於落花能述春秋之景情而雅藻風致如此幽

艶者尤少可謂衆作之奇巧詠中之絶唱也

同戀四

祝部成賢

冬ちよこゝ猶物おもふ名とり河字りり志せ
せにれこる埋木

同雜中

源三位顯氏

年ふまよかはりもやふぬあとり河うけ身抱
いまはせゝ埋木

同

藤原伊長朝臣

憂身世にむ見果さるあとり川又埋木のり
そや抱ふらん

續古今戀三

定家朝臣

あゑと絶て袖のうへゆをあとり川今はわろ
身ふ疹をわたりたもあえ

中務卿親王家十首歌合に

同

源時清

あまの冬にありてふ川のむもき木のいつあ
ゑはれく憂名とりけん

續拾遺戀三

前中納言定家

名をり河いゝあせむともまたあふはあもへ
は人ぞうゑとつる哉

夏れ歌の中よ

新後撰夏

源三位為繼

あとり河瀬よあるてふ埋木も淵にぞえつ
む五月雨の頃

同戀一

津守國明女

埋木のいさや朽なむ名とり川あらとれぬへ
死瀬々は過に死

續千載神祇

中臣祐春

代とあけて神よほりふるなとり川うゝる瀬
まくと身ぞぞ祈り志

同戀一

少將内侍

いりまきて朽さおはてんかとり川瀬の埋
木あはれは純ぬ間に

惜久名戀といふ心を

同

式部卿久明親王

かおれては人れ爲うき名取河よとや泪に志
つみはつせも

戀の歌の中に

同

平 政長

うしきてもあふに志うへはかきり川よ志あ

らは純よせと埋木
題おらす

同戀二

大江廣氏

いがおれは憂名はりの名とり河あふせを
よそよ聞わたるらん

續後拾遺戀一

從三位氏久

名とり河あふせによとむ流木のよるかと志
らてぬる、袖うな

建保三年名所百首夫木集魚梁部

同二

僧正行意

いとつらふあはぬ憂名のなとり河梁瀬の浪
を袖にかけつゝ

同雑中

藤原真忠

名とり川いかる瀬にあらはれて身乃埋
木の人は忘れぬ

新千載秋上

花園院御製

流れくのそのよりありのなとり河かりの逢
瀬ふ身をやまつめを

同戀一

前参議能清

秋のよの月のこりりの名取川あき名阿らは

す浪の音あ

同

権中納言經光女

せのまゝに逢瀬は絶ぬ名とり河憂名はりり
せあふは絶にたる

同

贈従三位爲子

あふは絶くを忘れ物は名とり川あえさる
中のせゝのむもれ木

文保三年百首奉りけるとき

新拾遺夏

前大納言爲定

名とり河せゝのむもれ木浮とほみ阿らは絶

てゆをさあさきのころ

新後拾遺春下

権中納言爲重

夜と共にあす光る月のあとりに河を名とい
はん晴間たにあま

同戀一

源守法親王

名とり河音よかさてせみまのくのあ乃よか
原はつゆあまるとも

名所百首歌合下同

順徳院御製

とろかなるあみとせあとの名取川せきあへ
ぬせてもあらはきすとも

定家卿

あせり河心よをたす埋木のこととりあらぬ
せてのえりみ

家隆卿

名取河心のは、むも純木の下行水のいら
かあたへん

名取歌戀部

御集

土御門院

なとり川憂名よぬる、戀ころもあふをまつ
まねをちやはてなむ

長久二年祐子内親王家名所歌合

よみ人忘れず

名とり川底さへてらす夏乃夜は螢ひまなを
見えごとりほゝ

りきりかく忍ひて人よ忘れささりける人

よ

拾遺愚筆

定家朝臣

せり侘ぬ今はたれかことり河あらはれは
くねせゝの埋木

返色

同

名をり河ゆくての浪にあらはれて濛々そみ
えん瀬々の埋木

九月十三夜水無瀬殿戀歌合河邊戀

同

定家朝臣

名取河とと純は川ら忘れはれる袖のため
のせゝのむもき木

入道攝政家歌合に

詠藻

家隆朝臣

よみさくはあふせに見えよなとり川つけの

まをらの瀬々の埋木

家集

定家朝臣

那とり河心乃とそむことのはもとぬ逢瀬
はとぬり糸つゝ

家集名取河陸奥

夫木集

能因法師

名取河川ある鳥はあかれてもいとゆき水の
ますかとおもふ

河邊見螢といふ事を

同

民部卿爲相卿

埋木のこゝろもあはれ名とり川さもあらは
れてとみよる哉

六帖

同

名取河いせのわさる七瀬とも八瀬ともと
らぬよるしちたきは

建仁二年内裏詩歌合河上花

同春

参議雅經卿

さる花乃をのれあさかる名取河風をさる
と春の岩浪

仙洞三首河邊杜鵑

同夏

少將内侍

杜鵑をのりさけれのなとり河はや埋木のあらはれてなけ

文永二年歌合

同秋

前大納言資季卿

をもりあはこよひは秋は名取川月にや見ゆん
ん摺ゝのむも純木

弘安元年百首

同冬

後九條内大臣

埋木もあはれ紅葉の名取河あははれてゆき
冬のあらじよ

同

従二位範定卿

なとり川底に埋木あははるか紅葉はうへ乃
色にいつとも

同

西行法師

名取河岸の紅葉はうづる影は同じ錦を底に
さへあを

同

源重之

なをり川わさりて作るれしま田とゆるあは

川、よるれの多きる

太平記 圓觀上人

とちの冬、の憂なとり、河流、此來て、あつみやは、
てむせゝのむもき木

按、太平記、曰、法性寺圓觀上人、以關東咒咀之
罪、而元德二年七月十三日、竄于奥州、臨名取
川、所詠吟也

又曰、近江犬上郡、亦有同名、舉証歌、以備參考、
前件重之田家、歌亦所詠于江州也
犬上の床の山あるあと、り川、いさとこたは

て我名もらすか

名取石

想、夫、往昔、此河畔、水汀、有文石、而入于朝貢者、歟
た、不む石、あとり、乃石、と、ほ、ま、せ、給、ひ、る
お、三、十、一、有、れ、は、ひ、を、つ、に、一、も、を、り、れ
て、ま、い、お、せ、ら、る
重之

苔むさはひろむも、へむさ、れ石の數に、皆
とる千代はいを、つ、り

重之、奥州、刺史、依命、而賦、一首、之和歌、而分書、
之、每石、獻焉、實風流之雅玩、好事之幽致、後人

未知如此有事實故表出于此想夫往昔此地
出文石者多乎因如今有紅石赤石名誤曰碁
石

太白山

或曰下篇生出峯乃謂此山生出俗誤其音

在茂庭村高峻可愛突兀于城南山外矣鄉俗稱
鳥兔峯往古大白星墮而所化也相傳往昔山上
有巨人常踞峯頭風詠自樂焉踞石今存也山下
印左脚右址杳在吉田村邑田中長可三尺餘濶
半其尺北其足鄉人言往古地仙之徒往々於山
中而出沒隱見時々來游于此地焉仍認遺蹤于

山頭仙臺之地名亦因此事實出焉

古老說曰夫奧州郡國之東陲殊叢險之國也
故高山巨嶽深澗幽壑危峯怪巖神洞鬼窟尤
多是以有羽人飛客換骨輕身之徒而雲栖本
食之者亦可多矣是以篠谷有仙人嶽之稱湯
原遺仙翁峯之名想夫上代有神仙游息而得
其地名者足以推識矣於是更知茲地本是仙
境也

又曰往昔白河有巨人不知何許來支體大而
膂力多鄉黨曰大膽子在民間而好善稼穡主

悅_レ之_テ後_ニ負_フ邑中巨山_ニ如_ク隣鄉相傳_フ其負山乃下野茂邑山是也時々隱見_ル于人間遂不知其所終焉其足跡認_テ在野州奈須野原上濶一尺許長加_フ二尺其事頗相似大白地仙矣俱是妄誕怪異豈夫然耶但有見_ル巨人履_テ之_テ而生_レ后稷之事則中華亦有此說可知也

東坡云羅浮山有野人相傳葛稚川之隸也鄧道士守安嘗於菴前見其足跡長一尺許以酒一壺依蘇州韻作詩寄之

高楯古城

在吉田村相傳藤秀衡之古壘也一說贖朝東征次重于此山館焉又東南有一丘外郭謂秀衡丘上有羽黑叢祠鄉人言伊達十四世種宗君在伊達郡屢接兵于葛西大崎而取名取刈田柴田黑川四郡台家臣福田駿河守之

熊野神社

在河上村緣起說曰昔年名取郡有巫女信紀州熊野參詣有年老後不堪長途鳥羽帝保安四年勸請三山神祠于名取河南東稱若王子中号證誠殿西建老女祠山頭祭高館權現又建善遊堂

及寺院十六區、蘋蘩隨時禮典無怠、爾後崇德帝
保延中有役徒欲赴奥州而遊于松島平泉、辭東
行而寢于證誠殿、有少童忽言、東奥有名取老女
者、崇當社多年老羸不相見久矣、須憑爾傳語、且
付此物也、醒來枕上有椰葉、葉上有文字、乃和歌
也、美知登乎志土之茂、伊豆支加漸々於伊尼計
里於毛比乎古世與連、連戊和須禮志、役徒東行
傳之老女、感動悲歎不覺涕淚之墮、迺引役徒示
其地曰、斯地幸擬證誠殿、左右皆末社也、西北有
原野、移飛鳥里西南有瀑布、象那智飛龍、名取河

流爲音無川、焉合彼地理方隅者、自然之奇遇也
役徒聞老女語、對地理狀驚之曰、是乃神感之所
致也

東史文治五年己酉十月二日記、囚人佐藤莊司
名取郡熊野別當各許還本處

神庫所藏文書多、文治五年七月十日賴朝卿
觀應三年四月廿九日右京大夫文和四年三
月十五日平中務貞治五年十一月十五日平
親貞永和四年十月九日陸奥守承德四年五
月十九日源棟義應承十一年七月晦日沙彌

某等書也又有文和二年癸巳四月九日右京大夫以名取郡北方三本塚郷而寄附富社大般若轉讀料之書又有伊達十一世大膳大夫持宗君寄附花鯨一口於富社而修冥福之事

老女叢祠

在前田村中新宮東南一里餘遺址猶存

烏鶺宮 一作神鳥宮

去老女祠一町餘老女建神鳥祠祭之以熊野之使令也

老女墳墓

在下餘田村北釜中島之間也

熊野神詠

新古今神祇歌

道遠名程もはるかにへたゝりぬ思ひたこ夢よ我も忘る

此哥は陸奥ふ住ける人の熊野へ三年まふてんと願を立て参りて侍るかいみしうをるこわりけれといまふさゝひをいかにせんとあはれて御前より臥ふりける夜の夢

按右詞書與老女故事小同大異歌上句不同
姑存以備參考

宗禪寺

在根岸村号青龍山宗禪寺相傳百一代後小松
帝應永年中北目館主栗野大膳大夫所建也鄉
人其地曰宮澤

合派大悲閣

在袋原村号無為山落合寺安雲慶作觀音名取
廣濶兩流合派于茲鄉俗曰落合

名取浦

出色葉集萬葉名所浦部曰下流閑上之江濱乎
索之萬葉集未得其証歌

飯野桃花巷

飯野村巷多植桃樹前大守綱村君一春南行路
過此村落斯日也桃花盡開紅白相交滿村之豔
陽甚可愛顧侍臣稱曰此弊邑也居民雖鮮少風
光殊富可謂墨錦鄉也稱之巷邑而可乎鄉人因
大守語家家栽培桃千樹認先君之遺愛以比諸
甘棠

弘誓寺

在飯野以南曰金剛遊山弘誓寺相傳觀喜年中僧良賢者中興之寺庫珍藏最多其一舍利三枚收水晶塔其二牛王玉色碧黑相混斑斑圍四寸四分其三兩界曼荼羅二幅善無畏真跡其四勢至其五十三佛及十王其六地藏長三寸空海作其七龍蛇以唐金而作其八大乘經白紙黑字其九辨才天並六箇空海或彫刻或書寫其十藥師行基所畫其十一帝釋韋馱二天智證作其十二淡墨繪旨其記曰

天正十一年六月廿八日宣旨上卿甘露寺大納言權大僧都真珪宜叙法印藏人左少辨藤原宣光奉其十三大炊御門會紙曰詠松歷年和歌正二位藤原經光以久千代農春毛北野乃神垣耳松能絲乃色增流羅牟其十四不動像其十五十六善神共土佐所畫其十六愛染畫像度磨所圖其十七次信所書紺紙金泥彌陀經其十八唐鏡徑四寸五分八角裏面有飛鳥花紋其十九駒角長可一寸其色淡黑其二十不喰貝化石蛤也考年号而無觀喜者蓋寬喜之誤乎八十五代

後堀河帝年号天正十八年百七代正親町帝年号也

栽松

寺西南有大悲閣下有稻荷社南山下建彌陀堂坂下有喬松鄉人謂之栽松或曰源重之所詠鼻輪松是也

笠島道祖神

在笠島村祭洛陽賀茂川西一條北出雲路道祖神之女也往昔私通商賈故所謫流死于此州人立祠祀之以元夜為祭日焉九月十九日令神輿

之于北釜還鄉人祈神有應則為陰相而賽之

按蟠龍子曰道祖神乃猿田彥大神也上古迎瓊々杵尊降臨於天八達之衢天細女命問之答曰吾名是猿田彥今雍州出雲路道祖神也麗氣記亦曰之道辻神是也神名異記曰伊勢度遇郡大土公神社猿田彥大神新古今集淑望詠猿田彥歌久堅乃天能八重雲振別天降志君乎我曾迎邊之其說如此道祖神女通商人等事不見正史神籍若俗說則邪神也淫祠也又今川了俊紀行播州四竈鄉有出雲路社造

陰相掛之於佗邦亦有之

下妻神

在社前一町以南本社東南手倉田村飯野坂邊
有小社是亦妻神也本社神輿息乎此地
鳥井遺址

社南二町余曰馬湟宅有兩大石礎鳥井之遺址
今猶存

認鐵古杉

在社西川內澤往時藤秀衡上京經此地傍有老
杉射而賀其首途從者亦進其鋒鏑去明曆中古

杉猶存根圍一丈二尺鄉人佗日欲伐之造商船
焉坎々什之鳴動之聲及鄉隣割之遺鏃頗多造
功已畢泛于滄溟其前宵有妖聲未幾而損壞
東國道

杉下有一細路是往昔通行之道鄉人謂東行路
實方中將墓

有兩地一則在搵手村山畔一則社北七町餘在
農家後曰北野宅設叢祠是其墓址也或曰作術
臣者墳址也是傳古之佐具叡神社而鄉俗誤其
語音者也然不能質傳來之愆焉可惜

神社考曰一條院御宇中將實方坐不敬謫奧州三年註和歌名所以爲歌枕尋阿古野松而無知人有一翁謂實方曰阿古野松在出羽國奧羽昔一州而今分爲二實方趣出羽見阿古野松是乃其翁盪竈明神也其後實方騎馬而出過一社或人曰是陸奧名取郡笠島道祖神也行人必下馬實方問何神荅曰王城賀茂川西一條出雲路道祖神之女也以密通商人故被於逐來此州人祭拜禱者造陰相懸神前必有靈驗今中將其復祈歸洛實方曰然則此下品之女神也我何下馬哉

經行實方馬俄斃實方亦死同葬社側其靈化爲雀飛來王城入內裡殿上臺盤以飲啄飛鳴云古事談曰一條院御時實方與行成於殿上口論之間實方取行成之冠投棄小庭退散云云行成無繆妄靜喚主殿司取寄冠擺砂着之云左道二イマスル公達哉々々主上自小部御覽シテ行成ハ召仕ハルベキ者也ケリトテ被捕藏人頭于時備前介實方ヲハ哥枕見テ參レト被任陸前兵衛佐也實方ヲハ哥枕見テ參レト被任陸奧守實方於任國逝去云云實方小一條左大臣母左大臣雅信女行成伊孫義孝少將男謙德公爲子母犬納言保光卿女

西行撰集抄云むら殿上のたのことも花見
んとく東山ふたは志ありけるまはらふあ
ころあは雨ふりて人ささはた給へりけるに
實方中將木のもとに立よりて

拾遺集よみ人しらす

さきらかり雨はふりたぬおなとくはぬる
とも花の陰にくとまむ

とよみてもりをる雨にさあるぬぬれて將束
をほり侍る此事興ある事お人と思ひあかた
けり又の田齊信の大納言主上にうゝる面白

き事の侍り志と奏せぬるゝに行成その時藏
人頭にえたはえける歌はれも志ろ志實方
はたこありとのまひくたり此詞と實方も
れれ、給ひてふらをうらみをふくみともふ
とを問侍る

實方竄東奥之事實不見正史且故事談等説
亦不詳其由記者亦黨行成而貶實方今按據
西行記則實方之報怨雖坐不敬不可免焉其
實直在實方面曲在行成含憤報怨宜哉唯惜
其事出於倉卒而不覺陷不恭之罪矣想夫實

方在_ニ摺紳之中_ニ而秀_ニ和歌_ニ可謂堪_ニ才能_ニ人也故_ニ
世以爲_ニ秀逸之先輩_ニ焉矧_ニ又此一首胸襟之高_ニ
吟咏之優古今之絶唱天下之美譚也且綠枝
之帶_レ雨_ヲ胡_レ惜_レ催_ニ吾吟_ニ紅濕之含_レ露_ヲ不_レ厭_レ沾_ニ吾衣_ニ
温藉風流實_ニ好事之人也_ニ是以花山帝之於_ニ聖
選_ニ也載_ニ諸拾遺集_ニ然行成以_ニ私意_ニ而妄_ニ讚_ニ之_ニ至
尊_ニ前_ニ是固_ニ嫉_ニ才_ニ賊_ニ人_ニ之尤_ニ者_ニ而可_ニ必_ニ深_ニ惡_ニ而痛_ニ
絶_ニ之人也然_ニ帝不及_ニ乎此_ニ却_ニ罪_ニ實方_ニ而賞_ニ行成_ニ
縱_ニ令_ニ實方之怨_ニ出_ニ一朝之怒_ニ而忘_ニ其身_ニ在于帝
心_ニ則豈_ニ令_ニ兩徒不_レ糾_ニ其是非_ニ斷_ニ其曲直_ニ而遽然

陷_ニ其重科_ニ哉後人不_レ察漫_ニ爲_ニ之_ニ詞_ニ而舉_ニ于口_ニ筆_ニ
于書_ニ令_ニ實方入_ニ喪心者之域_ニ實_ニ可_レ歎_ニ哉故_ニ今_ニ千
載之下爲_ニ實方_ニ惟_ニ切齒_ニ發_ニ憤_ニ以_ニ左袒_ニ于其非罪_ニ
云_ニ爾

又ち此國よまかりとりたるに野中に常よ
りもとれぬ志死塚の見ゆるを人に問は
れは中將の御墓と申そこ此の事なりを申
けれを中將をばそれの事と又問はまは
實方の御事なりと申けるいとらなごり
けりさぬぬぬに物あはまにたをゆるに

霜かれのすゝき不此不の見えこよりて後
にうたらむ詞ありやうよた不えて

山家集

西行法師

をちもせぬ其名はありをどゝめ置てりれ野
の薄うたえおぞ見る

新古今哀傷部詞書少異也爲參考記之

みちのをよへをより侍りたお野中よ常よ
りはとたはたれ塚乃見え侍りたせ人に問
侍りたかは是あん中將れ墓とことえたる
に中將とは何れ乃人そとりさねて問侍り

たのは實方の御事ありと申いと哀れおた
ほゆさぬに物あえれ霜りれれを
死ねれは乃見ゆる後の物語にも詞か死心
地を侍けれはと有

按西行文治中、人自一條院永延元年、至後鳥
羽帝文治元年、己百九十九年、及經過斯地、而
見草枯、墳遺、仍發無限感慨、而吐此苦吟、於是
亦實方之遺愛、令後人興思慕之情、之實可視
焉、嗚乎、一首之挽歌、寓無窮之悲哀、令讀者流
涕于千載之下、是亦和歌之神德也

停馬地

去社西北七町餘在搵手村實方落馬停馬于茲
今日停馬地

寓舍宅

去社乾一町餘在同村實方落馬所寓舍之地也
故曰寓舍宅

臥書地

去社二町餘肆尸以東半町餘實方病革氣息將
絕時作家書于臥床故曰臥書地

肆尸地

在同村社邊以北三町餘停馬以東一町半實方
遺言曰我得_レ不敬之罪乎神明如今臻茲宜肆尸
乎斯地示_レ後昆以爲警戒焉仍置尸于茲二三日
故曰肆尸地

火葬地

同所實方火葬之地也火化地俗人曰竈地蓋死
者之於火化也猶烹爛魚鱗於竈中仍曰諸竈地
或曰實方眷戀阿古野之松也切矣故沒後送尸
羽州而座于千代山下建寺曰唐松山萬正寺以
阿古野之松在處也

縹環邑俗曰盤手則非也於此字義亦不當故聊易之以此字

笠島北邑也其地往昔理實方馬具之縹縹者固結也所以繫鞅鞅于鞍下之環而固結馬具者也故以理縹環于茲而後人舉為邑名焉實方墳墓以在此邑而為是也

元祿元年戊戌依命問名取名勝路過于笠島而觀其蹤里人村翁不斥言實方名而直稱中將君敬之也如鬼神仰之也如主君說舊時也如親見談往事也如面命嗚乎古人亦多遺名實方抑何人哉雖身陷不恭之罪而神沒代鄉

之鬼千載之下仰慕其風想見其人而遺愛如此夫久矣古人所謂桃李不言下自成蹊者實方之謂乎

中將宮

在笠島神社東南實方沒後眷戀已深遂化白雀入禁庭而屢為妖怪詔賜神号建祠祀之

按實方不忍一朝之怒永觸帝震怒一竄乎東輿而不復還于帝鄉遂沒夷狄邊鄙之地焉可謂積鬱沈恨之深者也宜哉眷戀乎帝闈之臻茲矣其事實雖具不記于載籍而見于歌句

撰集中者可併考之證亦維多故每涉獵于歌
林采而輯之欲令後人略知其始末焉如今讀
之則俾視者不堪惆悵酸鼻於今日云

已下十三首共關實方事實者故低書以備
便覽

實方朝臣みちの冬よへをぬり侍らる時
給はせらる

新後拾遺離別

花山院御製

あにふともかふひてこそ過志川流い
にせよとて人のゆをらむ

今拜讀叡作而乃知實方平日昵近之親而
帝亦離別之宸襟極深也令讀者不覺涕泣
而嗚咽焉宜哉采花雨之吟而收之拾遺集
實方朝臣とちのくよへくよりらるよ

夫木集

能宣朝臣

己あるへに別れありせむれもふと涙は
みちひむせとまじやは

以此歌考則知當時朝士群臣議流刑之不
相當者多隱然在其中矣細味可別之文字
則這裡有真意而其非罪之旨自可視

實方朝臣其志の國へをたりたるに馬の
はあむとすとてよみ侍りる

新古今別 中納言隆家

別を路はいはむなりされ絶せぬよいせし
悲なき秋のゆみくね

返し

同 藤原實方朝臣

と、まゐむおとは心にくなへともいふに
や勢まき秋れさをふせ

按實方當顛沛之時而一字不著非罪之

意一言不加訕上之詞唯述秋色之催別
而有從容不迫之氣象可謂能呈性情之
正者也若議唐詩之間則自然有盛唐之
風味而哀而不傷者獨得于茲後人不知
其旨尤可惜矣

實方朝臣みちの國へをたり侍ける時志
とをらばかはすとて

拾遺別 右衛門督公任

東路の木のをたくくをなりゆりは都乃月
は戀とらめやは

一時之楮紳朝士餞別之厚相競致懇款
丁寧也如此可見實方非罪之實不刑之
證在茲

陸奥の任に侍りる頃五月までほど、
すれぬよと申て

續後撰夏

實方朝臣

都には死、ふりぬらんほどと、きす關のこ
なこの身こそつづけけし

返と

よみ人志らつ

同

子規名社此關のありりせと君かねさ死に
ま川そ死のまし

夫謫客流人居江湖之遠阻荒裔之遙尤
可哀之甚者也况遇節物之新感花鳥之
時乎實方在東陲之地而杜鵑聲絶關山
道路長憶帝閣而不見奉宣室以何年屈
平有言曰望孟夏之短夜兮何晦明之若
歲郢路之遼遠兮魂一夕而九逝如今與
實方謫居之情聊相似

かたらむ侍りる人のもとふとちのをに

より弓を引くはすとてよみ侍れる

後拾遺雜五

藤原實方朝臣

みちのくの阿さちのまゆみ君にまぢ思ひ
たえたることも語らえ

實方朝臣みちの國より人のもとへ弓を
つゝらして戀をいはは是をいさきてまぢ
と申たり返忘人あはりて

風雅戀三

三條院女藏人左近

是やさは安達のみ弓いまこぢはれもひと
めたる事もうとあめ

左近歌想夫前作之答詞乎在東奥而遙

寄切思之贈一別心知兩地之情可感乎此

陸奥國に侍れる頃中將宣方朝臣のもと
に川かはあはる

後拾遺雜五

藤原實方

やさらはて思ひ立あま東路にありけるも
れをはらうらのまぢ

按兄弟關一作憚關若前說則宣方乃實

方之連枝乎若後說則只詠東奥之名地
而歌之意味尤薄矣須從前說則實方意

趣亦歸厚也

實方朝臣みちの國に侍ける頃いひつり
はしける

同

大江匡房朝臣

都わは誰をの君はれもひ出るゝやこ乃人
は君をこふぬり

返し

同

藤原實方朝臣

わまの純ぬ人の中よ忘純ぬをまはぬん
人乃中に待やは

匡房憶舊友於東奥而盡心知之情慙
切實實方亦能述相思之志無餘蘊矣今
日讀之則再灑感慨之淚也

陸奥國へをぬりて後ほとゝ死すのこゑ
をきゝて

拾遺雜春

年々へて深山ろを純の郭公きと人もあ死
音をのみそかく

實方去帝郷而道路千里謫居寂寞客心
無聊杜宇泣血之中斷愁腸于不如歸之

哀音而動若干之鬱念焉多年之不遇亦
隱然于句裡也

自笠島至此凡十四條共記實方事實
以備便覽

栽松城當收之之前條栽松之下

在栽松村相傳多田滿仲往昔居此館焉滿仲是
奧州刺史任國之間在武隈館而無居此館之事
也然則為防禦設之而備要害乎

雄幸橋

在川上村相傳百四代後圓融院永和年中有桑

島宮內者甚張威福而稱善人有一女號幾世有
容色鄉有山上雄幸者男色動鄉黨俱同村巷焉
幾世佗時見雄幸而思念日夜不息私通艷書而
終有雲雨之會爾後屢欲再會而不能焉幾世不
耐眷戀思慕之切詠一首之哀吟投身而死時
十有六其遺吟曰

うさりされあはれにきゆる身は瀬川志津
むも嬉しそゑれ何れせを

雄幸亦遂死于情是亦二十有一歲鄉人哀而立
石題曰幾世墓永和三年三月十日歿高三尺六
寸濶一尺六寸

五寸餘厚雄幸墳亦隔川而在有小橋往昔雄幸
四寸五分雄幸墳亦隔川而在有小橋往昔雄幸
通行之地故鄉人曰之雄幸橋

仙臺佛一作千體佛

在飯田村相傳五十六代清和帝貞觀中釋慈覺
所造舊在今治府地黃門君構城池之時移之此
地云或曰其佛像有千軀故名之

武隈神祠

武隈乃地名祀稻荷神在岩沼驛西社邊有八幡
雷神愛宕叢祠及觀音小堂社後有稱寶窟者鄉
俗以為明神窟也其真體乃封狐而如今現在于

窟中也大古騎竹馬而來于此地故武隈文字或
易竹駒訓音相通而幸為寺號也岩沼村落崇野
狐頗如神仲春初午日行祭禮

按稻荷者考神書則倉稻魂也豈以封狐當之
哉然諸國以此神而實為老狐之精於大成經
亦有其說是乃浮屠附會者豈足信之哉尤可
痛恨之至也夫斯地亦往時有此狐窟而好
事愚昧之者以為神迹之所垂焉建神祠因地
名而號武隈明神者也為神道者雷同而無質
其妄誕令神明遂蒙此淫號矣切怪神明亦不

加_レ罰_テ神官_モ亦不能_ハ咎_レ故_ニ俾_テ神明永_ク陷_リ于妖獸_ニ而
汚辱_ス蕪穢_之甚_キ不_レ復_シ悲哉
白井宗因稻荷說_ニ曰或問_フ稻荷神社僧空海於_ニ
東寺門前_ニ逢_フ負_フ稻_ヲ老人_ニ海祭_之以_テ爲_ス東寺鎮守_ト
以_テ其擔_ヲ稻_ヲ故_ニ号_フ云奈何_ト曰不知_レ焉者_ハ以_テ爲_ス然_ト知
焉者_ハ不_レ信_セ故_ニ予_レ舉_テ其神名_ヲ使_レ見_レ之_者不_レ惑_ハ也昔
者神社多_ク爲_ニ浮屠_一見_レ攘竊<sub>還_テ就_テ浮屠_{覓_ニ其說_ヲ令_下}
之<sub>爲_ニ其傳_ヲ爲_ニ其記_一胥率_之陷_リ于夷狄_{梵語之中_上}
證_レ之<sub>以_ニ三昧_一非_ニ神喜_一之_{猶_レ不_レ得_レ己_也雖_モ然_ト至_ニ久_メ}
而不_レ矯_メ則猶_下治_シ飢_ヲ於鳥啄_{止_中渴_ヲ於酖毒_{故_ニ比_レ不_レ}}</sub></sub></sub>

入_ニ乎其肺腑_ニ而救_ニ之_ナ吭胸之間_ニ則庶_ハ乎復生_矣
其号_ニ稻荷_一者_ハ所謂_ニ荷田_一神地_ニ置_ク倉稻魂_一故_也又
豐_ト章_ハ原_ハ卜_ラ定_ニ記<sub>云_ク辰_巳乃_{方_仁當_天倉稻魂_乃}
垂_テ跡<sub>阿_利夫_此神_和百_穀於_{播_玉故_仁名_奉神}
代_乃昔<sub>與_利此_峯仁_{向_玉母_不知_只三_峯仁_顯}
玉_之和_人皇_十三_代元_明天_皇和_銅四_年辛_亥
二_月十_一日_仁垂_跡寸_誠仁_諸人_哀憐_乃御_心
深_久蒼_生作_牟物_和草_乃片_葉末_天百_乃災_於
禳_玉又_日間_二月_初午_之說_{奈何}曰_神祇_拾遺_ニ
云元正帝御宇當社影向之日偶二月初午日</sub></sub></sub>

也故至今用此日右三條神社啓蒙說宗因以爲神号自然有之然深疾痛絕于出空海者矧以神明而實爲封狐比走獸乎於此數說切實讀之可視其妄誕矣且駕竹駒之拙乎寺曰寶窟山竹駒寺相傳往昔能因法師所開基也自祭祀前日設診羞具盛饌而供于窟前或入生雞于窟中以爲牲牢封狐盡食之去寺僧鄉人以為神享之驗而喜之寺中所藏舊物多其一印行大般若其二板行大乘經裏面用女筆反古建禮門院所寄附也其書

曰敬白十二斷食右生涯禁食之如件嘉元第三歷仲冬初八日平民女敬白外亦女子書簡之草也俱女院親筆也筆痕精采頗得婦人之書法其三涅槃像畫樣高古畫中記曰美濃州神淵山龍門禪寺永寬供養貞和三年丁亥六月十五日畫僧宗久摸張思恭筆其四十六善神唐畫其五不動象空海智證畫跡八大童子未詳其人愛染象惠心畫迹其六猛虎唐畫其七集歌帖廿七首是乃一時搢紳筆痕書武隈古詠外題門主所書也按能因開基說未詳焉所藏緣起及華鯨銘卑

俚文盲不足_レ視_ニ焉夫武隈_ハ者東奥之名區世上
知_レ之能因_ハ者歌林之翹楚衆人知_レ之且夫能因
其先_ハ出于敏達帝_ニ而得_ニ佳聲_ヲ於敷島_ニ就_ニ中_ニ白河
秋風之作所以_テ膾炙_ニ于人口_ニ稱述_ニ于海内_ニ者也
然後身東遊_シ歷覽_ス于奥境_ニ而作_ニ八十島_ノ記_ニ豈_ニ不
知_ニ武隈之故蹟_ニ者乎哉然_ニ妄設_ニ竹駒之卑說_ニ而
沒_ニ其佳名_ヲ誣_ニ能因_ハ者俱_ニ後人之附會_也女院_眞
筆者亦年代不合_ニ嘉元第三曆者九十三代後
二條四年乙巳也女院崩御_ハ在_ニ八十二代後鳥
羽建久二年辛亥_ニ至_ニ嘉元三年乙巳_ニ既百十五

年相去_ニ如此_ニ其遠_シ矣不_レ考_ニ年代_ノ之誤_也貞和三
年丁亥_ハ乃九十七代光明帝_ノ十一年也

鼻輪松樹鼻輪或作鼻端

在_ニ館西_ニ岩沼驛西五町餘過_ニ小坂_ニ入_ニ其地_ニ二樹相
並_ニ枝葉繁茂_ス又見_ニ前條栽松_ノ下_ニ
藻鹽草第五奥儀抄_ヲ引て_ニさけくま_ノはあは
の松共よめり

源 重之

さけくまやはなはにさてる松さよも我こ
と獨りりとのはさく

年とへて誰とまつと武隈のはなはあの
とはいてとてゐるらむ

按るるは奥儀抄本書には前の歌の外此
一首あり

武隈乃はおはとて山のと出たる所の有を
りとそちうを見たる人は申し此松野火は
ににれを源の満仲の任あ又うふ其後又字
を道貞か任にうみそのち孝義きりて橋に
つをるうとてありける人ありこれよりう
よりさりとともなをよむへと云云

奥儀抄本書に考証は其間少異也仍旁に附
之

歌林良載云奥州とをまといふ所は二木は
松あり是によりておもひをいへりはあは
とは山はさゝ出たる所の有をいふなり
袖中抄曰古歌云

これのみやともさりとては武くまは
なはよとてゐる松もともさり

拾遺集を引て云

我乃みやともたりてへは高祖のとのへに

奥羽観音堂志 卷之五

たてる松もこもたり

とはいはれたれ高砂此松は二木ともきこえ
す又摠して山の松おはは二木に限るへゆ
は又武隈のはあその松をもよえり重之歌有
武隈のはあはとて山れさし出ある所の有あ
りせそちうく見さる人は申し教長卿云宮城
野は武くまの松も待けきと今は見えすと云
宮城の武隈はあは館はひをつ所也按宮城之
隈傳聞之
誤也

按奥儀抄或稱二株松フタキ或曰鼻輪松混爲一所

同樹皆傳聞想像之說也唯源重之之歌意爲
別樹且夫歌句之旨亦暗含兩株之意據哥林
良裁說則又混二樹而爲一處如今點檢其樹
實別樹也於是始信焉重之實見不可誣矣以
此說而可爲正焉

二株松樹

驛西五町餘館南六町許自寺北亦阻一町餘今
臨其地一樹交翠馬鬣垂枝可怪

自古稱來曰武隈雙株松一日臨其地而須有
兩樹而却存一株焉與其名稱不相合焉以重

之_ハ歌_ヲ考_レ之_ナ則_チ稱_ニ鼻輪_ト者_ハ一樹_ニ而_{シテ}往昔_ニ名_ニ二木_ト者_ハ
可_シ兩株_ニ也_ハ然_レ則_チ此_ノ松實_ハ稱_ニ鼻輪_ト者_ニ而_{シテ}鄉俗_ニ失_レ其_ノ
地_ヲ乎_ニ此_ニ却_テ稱_ニ二木_ト松_ト乎_ニ又_チ名_ナ寄裏_{書_{カキ}}及_チ歌人_ノ說_ニ
曰_ク武隈_ニ二木_ト松_ハ在_リ館前_ニ也_ハ於_テ是_レ世古_ノ松枯_レ盡_ハ則_チ
依_レ舊_ニ繼_テ新_ノ松_ト者_亦見_ル乎_ニ書中_ニ按_ニ如_今所在_ル松_ト亦
元_ニ有_ニ雙樹_ト而_{シテ}一株_ト枯槁_シ唯_レ餘_ニ一樹_ト乎_ニ
又_チ摠論_ニ古人_ノ說_ヲ曰_ク二木_ト鼻輪_ト稱_シ來_リ久_シ然_レ古書_前
人_ノ之_レ說_ハ異義_ニ紛々_ニ繁多_ニ叢雜_ニ落著_ニ不_レ分曉_ト故_ニ如
今_ニ舉_テ諸說_ト而_{シテ}言_フ之_ナ藻_ト摠_ト草_ト引_テ奧儀抄_ト而_{シテ}始_メ謂_フ武
隈_ノ鼻輪_ト松_ト而_{シテ}末_ニ篇混_ニ二木_ト而_{シテ}說_ク色葉集_ト亦_レ相同_シ

歌林良載始_メ謂_フ二木_ト而_{シテ}後_ニ混_ニ鼻輪_ト又_チ末_ニ合_メ爲_ニ二
木_ト事_ト了_レ袖中抄_ト專_ラ謂_フ二木_ト一_ニ事_ト而_{シテ}能_ク因_テ季通深
覺_レ之_レ歌_ト亦_レ同_シ其_ノ旨_ハ唯_レ源重_ノ之_レ特_ト挺_レ然而_{シテ}爲_ニ別樹_ト
且_チ於_テ歌意_ト亦_レ如_レ詠_ニ一_ニ松樹_ト是_レ乃_チ身踏_テ其_ノ地_ト而_{シテ}所_ニ
親見_レ之_レ證_ト尤_モ可_ク貴_シ
二木_ハ則_チ須_レ取_ニ袖中抄_ト之_レ義_ト鼻輪_ハ則_チ須_レ信_ニ重_ト之_レ說_ト也
清輔奧儀抄_ト云_ク
此說_ハ色葉集_ト亦有_ニ之_ト大同_ト小異_ト故
うへ_レ時契_リや_レおん武_クまの松_トをふた
あひあひみつる_ノあ
武隈_ノの松_トを何_レまの代_{ヨリ}有_ルる物_トとも_レおら
ぬ人_ハうへ_レま時_ヲよ_レまま_ニおは_レは_レほつ_リあ

思ふ

くもやせて書いて、侍るあり此松はむろを
色葉集此松は以下相同 良字也

より有にあらす宮内卿藤原元善をいひとる
此字なし

人の任ふ館の前に始てうへとる松也陸奥の
司の字有

館は武隈をいふ所に有此人ふたゝむの國
よなりて後れたひよめる歌也たれをまのは

あはの松をもよめり重之歌云
たけをまればなはにたてる松たにも我を
を獨りりとやは死を

武隈のはなはとて山のさし出たる所の有あ
りとちかくまたる人は申せし此松野火ふや

けふければ源満仲の任正字又字なま其後又うせ
たり

あつをりて後絶なかく失にあけり情なき心はせ末の代迄名をなかしりさりととめりなくとももなとよむへ志

袖中抄云、
うへを時契りやあけんさけ熊の松を再む
あひみつるあ

顯昭云武をまの松は陸奥の武隈といふ所よ

二木ある松也此歌を宮内卿藤原元善々陸奥

の初任に件松をうへて後任によれる歌也其

松野火の爲に焼うす其後滿正の任にうす其
後又うす道貞に任まうす其後孝義死りて橋
に作る其後失終りに死せ云云
又能因法師陸奥國へ再ひ下統り制るに後度
を武隈の松もあかりけ統は
よれをまの松は此たひ跡もあふ千とせを
へくや我は死候らん

橘季通朝臣等乃國よりの布りて

武隈の松は二木を都人いりゝとせは、三
木とこたゑむ

りゝる歌をかんと先りと自賛とらるをきゝ
て禪林寺大僧正深覺返し

たれをまの松を二木とせ死せいは、よを
よめるにそ何れぬなるへそ

橘爲仲朝臣等ちのまの任をてゝのはるとて
みささとへ我はりへりぬ武隈のまつとは
誰につけよとかねもふ

右五ヶ條共は袖中抄説

みち乃國に守にてまうり下統りたる武隈
の松の枯て侍けるを見て小松を栽つる抄

て任はて、後またたれあし國にまうりてか
の前の任よろへし松と見侍りて

後撰雜三

藤原元善朝臣

うへし時契りや志けん武熊の松とみた、ひ
あひみつる哉

舉前説者迺此歌也記以証出所之書下同
陸奥守よて下り侍らる時三條太政大臣餞
を侍げれとよと侍らる

拾遺別

藤原為頼

武熊比松と見ゆ、やあくさめむ君り千とせ

乃陰よならむて

小大君家集には為仲みち此國の守に
くたるに四條のねほれおそいとの、参
ん志給に有
あむりたらむける人みちのをふへまうり
けきは

同雜上

能宣朝臣

いりて猶我身ふりへて武隈のまつともあら
んゆくひとのため

按能宣實方同時人送行之歌見夫木集載

于前篇讀來此歌亦蓋同時之作乎送奥行
之意可見然詞書稱或人則記時忌時勢避
世情而隱其名者歟與花雨之例相同
則光朝臣の許に陸奥國より下りて武隈に松
をよと侍りる

後拾遺雜四

とをよまの松は二木と都人いり、とをよ、
みれとことへん
陸奥國にみよ、ひをより後の度武熊の松
も侍らさり、此はよえり

能因法師

武隈乃松は此度跡もなふ千と夢を経てや我
はきほむ

歌枕名寄に曰右一首陸奥に二度下りて
後の度武隈乃松も侍らさり、此はよめ
るとかん

同裏書云或傳曰藤原元善任國之時館前
所植置之松也具見後撰集其後火燒源滿
仲任國之時又植之其後又失橘道貞任國
又植之其後孝義任國之時切之造橋之後

永^ク失^セ畢^ル無情之名留^ニ後代^ニ者云々

橘季通^ス凡^ソ乃^リ國に下^リ武隈の松と歌に
よみ侍ける^ハ二木乃松を人とは^ハみきと
答むとよみて侍^ルを^リ聞^テに聞てよみ侍
^ル

同誹諧

僧正深覺

武隈の松は二木と三^ヲをいふはよきよき
よはあらぬなるへき

陸奥國の守もとよりの朝臣久しくあ^ハみ
ぬよき申^テい^ハは^レの^ハるへきをい^ハは^レ

侍けは

新古今別

藤原基俊朝臣

ゆへり來む程れもよ^キ武^ノまのま^ハに^ヨ
身を^ソいた^シ老^ニぬ^レ

橘為仲朝臣みちのねをみ侍^ル時歌^ハ
つ^クは^レる中^ニ

同雜上

加賀左衛門

覺つ^クを霞^ノ立らむ武隈の松に^ハま^キる^ハ春^ノ
夜の月

陸奥國へま^キり^ハる^ハ人に

新勅撰旅

藤原清正

りり我免此別をたもへと武隈のまけり程歴
む事我をやえり

續千載雜下

圓光院入道前太政大臣

武隈の松とよ乃みよかゝるへてむかえとみ
死と誰にうたふむ

藤原兼時陸奥守にありて下りたる小餞志

ともふとて

新千載別

九條右大臣

武隈の松は幾よをへまると年をうたへて

かへりあはあむ

新拾遺冬

光行

武くまの松のみをりもうはきて雪とみ死
をや人よかたらむ

新續古今戀四

前中納言爲忠

たげくまのまけ程過て問ぬあむろ志はみ
きをたもむいてめや

鎌倉右大臣

子規死冬とはな志にたは熊のまけにて夏乃
日數へにけり

事無草

六帖

さけをまの松にはいせ、年ふれとことか
草は生ひそはりたる

堀河百首

大納言師頼

あけくまの松乃みとりは改玉の年と俱あそ
ふらく成ける

松と

薄雲抄

生ぞめと根もふりたるは武隈の松お小松の

千代やならへむ

宮おて弓いさ参給にをたうあるに人めす
に達けは

家集

小大君

ま川程に久老わりたるゆを末のまよ遠はれ
は武をまのま川

さけくまの松一もとはうきにたる

同

重之

武隈の松一もとは枯はりり如参にあらふ
聲のさひたさ

年とへて誰をま川とり武隈のはかはあのみ

はいてたてるらん

武隈のはかはまたてる松さにも我ことむと

りありとやまきを

さけをまれば松は昔も成たりれとも跡と

さあとも見あまうりてよ見侍りける

山家集

西行法師

枯おける松あは宿のさけをまは三死といむ

てもあひなりらまこ

西行東行之時已枯槁也可視于此歌

拾玉

慈鎮和尚

さけをまの松もあひあをほと、死を二こと

とたおなうて過なむ

同

武隈の松あ心をあへてそみきとは人にも

さるべあさる

正治二年百首

尖木

参議雅經

さくくまの松あや音と立たえてはさは都あ
春のははかせ

家集杜藤と

權僧正公朝

武熊此松の梢は春と夏とよと木をとり藤
咲るる

建久八年百首歌合

從三位行家公

同

武隈の朽に志松の跡よまの誰字へうえて千
世と川きとん

長親

新葉集

よをなるとみきとはうりを契めて終ふ川れ

なれ武隈の松

同

後村上院

はるにたき見きとはいはて武隈の松ならぬ
身も年そへよる

草菴集

頼阿法師

何事とみれとかいはん數あらて我身いぢま
にたれくまのま川

陸奥國の任とて、れほり侍りくるに武く
まの松の下にてよえる

詞花九

橘爲仲朝臣

ふる郷へ我は歸りぬ武隈のま川とはと此に
川とんとやれもよ

爲仲爲奥州刺史東行之日任國之間客愁
之濃歸路之長別恨幽懷互發于吟咏者維
多依類聚于低書俾後人考其始末云

橘爲仲朝臣陸奥國へまうりける人々餞を
侍らるによめる

金葉別

藤原實綱朝臣

人はいさ我身は末ふかりぬれは又あふさ
をいひまつへさ

橘爲仲朝臣乃陸奥國乃守めてくさりける
時大皇大后宮乃大盤所よりとて誰ともな
を

詞花別

大皇大后宮甲斐

東路のはるとき道をゆきめをりい川かどく
へ死下紐の關

陸奥國へまうりける時逢坂此關より都へ
はやはとける

金葉

橘爲仲朝臣

我ひをりいそをと思ひと東路小垣根乃梅を

身有... 卷之五

先さちまはり

橘爲仲朝臣さち乃れをに侍はる時歌あま
さよみてつゝあはさるる中

新古今

白浪れこゆるむ末れ松山ははあとやみゆる
春れ夜乃月

橘爲仲朝臣陸奥守ありて侍はる時延任
さゆとれゝてゆりはさける

金葉

藤原隆資

ま川我はあはれ八十年に成ぬるとあふま

川乃遠さうりぬる

陸奥乃國に侍ける頃八月十五夜京をたも
ひ出て大宮れ女房のものとつゝあはさける

新古今

橘爲仲朝臣

見し人はせせのうらみせ音せぬにつれなく
消る秋れよ乃月

浮島明神

夫木集二

祈りつゝ猶あそたのめ陸奥あまつめ給ふな
浮島乃神

奥羽親廣朝老志

同四

浮島の花見る程はみちのくまをぬめる事も
忘れにけり

詞書見前件以事實前後重收于此

詞花

ふる郷へ我はるへりぬ武熊れま川とは誰か
川けんとやたもふ
信夫のさとにて

新古今秋上

阿やなをもくもふぬ宵をいとふ哉志のふの

里乃秋れ夜の月

以_テ歌意考_ヘ之_テ則蓋爲仲歸京之時所作也須_下
以_二下_一兩首之秋候而證_レ之_テ則其實亦併考_上也
皆所以寫_二客中旅夕之寂_一矣下做_レ此_二
と夜れ中山といふ所以て鹿れ鳴を聞てよ
める

夫木

たむ寐はるさやれ中山さ夜かりに鹿も鳴な
り妻や戀しき

陸奥の任はてゝのほり侍けるお尾張乃國

鳴海野にん、むらの鳴侍と此はよめる

同

ふる郷はうはらさりけり鈴虫のなるみの野
邊の夕暮の聲

無名抄に爲仲任はて、乃ほりける時宮城
野に萩をりて長櫃十二合に入て持々の
ほりけ此は人あまねを聞て京へいりける
日と二條大路ふ是を觀も乃あらく人ねは
をあめまりて車あとあまた立さりけると
そ

按爲仲爲_三武州刺史而久在_三武隈館其往還
任國之間信_シ夫鄉之吟旅懷之寂可_レ視十府
浦之詠客愁之情可想歎_シ遠遊于浮島留_二別
恨于武隈且携_三宮城之萩而壯_三皇州之觀焉
可_レ謂風騷慷慨之人也_レ就中留別之一篇與
彼唐戎昱別湖上亭作旨趣略相似也其詩
曰
好是春風湖上亭柳條藤蔓繫離情黃鶯久住
渾相識欲_レ別頻啼四五聲
別情之深感慨之長適與此合故附_二于此且

欲令後人知其性情之發無倭漢之異也

自詞花為仲歌至此凡十四條以次叙而輯于此以備為仲事實考究云

武隈古館

歌枕說曰二木松藤原元善任國之時所植于館前也然則松下邊乃古之館址乎鄉人未詳其地可謂遺恨矣今居館疑非舊時之地焉

遠望浦

非地名岩沼以東大洋之渺茫極目尤遠故以悠遠之狀而稱之遠望浦自入為仲之吟來却似稱

地名矣其亦看歌意可觀也

陸奥國に侍りる頃八月十五夜に京をおもむいて、大宮の女房れもとみはるは忘ける

新古今旅

橘為仲朝臣

見名人もとみのうららみ音せぬにはまなくすめり秋乃夜此月

按古來以宮城郡多賀國府山麓十符池混此浦名而為一焉豈然耶十符池本以菅薦得其名大納言經信卿之歌可併考此浦景

也海上望洋而口力更竭以其悠且遠得其
 名十符與悠遠和訓音響實相近因後人不
 辨混爲一所焉抑此吟也其所發者何哉爲
 仲久刺史于東國而在于武隈館偶值中秋
 月色之澄鮮乎行李蕭然客心無聊於是不
 勝旅愁寂寞之情望清風之淒涼而憶帝闕
 之舊遊對明月之皎潔而慕閨中之並照因
 茲所以苦吟而吐情實哀吟也奚乘此月夜
 之興取路于多賀山陰之杳哉相去已四
 十餘里 矧
 又彼地在山家幽隱中而欠海濱汀浦之象

乎弗思之也甚

鷹硯寺

寺在千貫松嶺北武隈西号龍谷山鷹硯寺相傳
 往時爲由利若愛鷹綠丸ミドリノマルカ鷹名所建也有大悲像
 曰長谷觀音南北村名出于此鄉說曰由利若夫
 人想海曲欠文房具テ締小硯于鷹翼而於之杳空
 不耐重墮而死後人取葬此山畔建寺是也或曰
 別有寺曰岩窟山長谷寺康平中摸長谷象而賴
 義所建也村名亦出于此

長谷古館

在鷹硯寺南南長谷村長谷紀伊守者故墟也
絲丸石

千貫嶺上深山叢祠西可三百步有一石長七尺
高二尺七寸東面立綠丸者由利若所飼鷹兒名
戀其主而至謫居傳書于夫人死後化石見由利
若草紙因言此邊乃往昔元海島也由利作由理
或作百合
俗說曰嵯峨帝朝豐後刺史曰百合若膂力善射
為時輩所重此時蒙古高句麗襲日本國仍命百
合若討之已有功及歸期而其臣別府者欺放之
元界島掠其夫人不從焉奪國而極奢肆也百合

若苦海曲有年矣後駕漁舟而歸鄉里告朝奉勅
遂亡亂臣別府云豐後府內有百合若墓今猶存
焉

按百合若事不見正史况無下來東國之由未詳
元界島者蟠龍子引豫章記曰孝靈天皇第五
皇子曰彥狹島命命為藩屏將軍奉勅在伊與
國自是世人稱之伊豫皇子爾來代々掌征伐
異賊六世三井者先鋒神功皇后于三韓其四
世曰百里十五世曰百男至十六世益躬奉推
古帝勅復征異賊射賊魁首鉄人者殪之十八

世玉與有故竄攝州難波憑漁舟而歸鄉里其
末葉乃河野氏也其族臣以別府稱氏者多又
日弘安四年後宇多帝辛亥蒙古使高句麗先驅襲
日本地遇大風于筑前博多賊船尽破裂多溺
死漂泊已甚此時賊將范文虎者得舟于同國
志摩郡鷹島立界自是歸其國云以此等事牽
合附會作此說者乎

千貫標松

貫者連錢之名千者謂其多在南長谷村而最大
山高嶺也上建深山叢祠山下有寺曰深谷山真

珠院其嶺上青松萬株隨山勢之高低而相連數
十町有屈曲有平直交翠排青標者標記也言商
船漁舟汎滄溟者或有泛々而失西東則杳望此
嶺松而得其方隅詳其村落焉於是有大安其意
者以爲喜歡之價以千貫而當之亦未爲過多焉
故棹郎舟子貴重此嶺松而所以標準之而相稱
以此鄙名也

東平王塚

在南長谷村千貫松嶺下上有青松十二株古來
相傳異邦人東平王者客死于茲座此山下蓋以

脊戀郷里也塚上草木枝葉靡然盡向于西云
 宗久紀行お路のほとりに一の塚ありゆれと
 の人の志こさをれ不えてあたりの木お詩歌
 かとあまた書附より志昔東平王といむる
 唐人の墓あり故郷を戀けく爰より身まわり
 けるかそ乃おもむの末にて塚の上の草木も
 皆西へりぬふと申かぬは悲りも語る人何
 り志かはいと哀に覺えておの昭君も青塚の
 草の色もこととりよこそ思むやら此志誰も
 旅乃そらにてはるかかりなは夜半のけふ

りも猶ふる郷此方にやかひるまじと憂世の
 妄執もありきあくこそれ不え侍りる塚上
 乃松の木何また生ならへるもうなる松をば
 是にやを哀なりと物語れよめ志もたもひい
 てらる

ふる郷ははにいかなは夢とかり後さへ
 猶も忘れさるるん

それをも猶過て武隈此松乃木陰に旅寝して
 木の間の月よ心とつくを
 河此こさりを過つゝ行水此りへぬことを
此の一句亦武名をり

うな志む此所も名取河の一故事

五言奉試得東平樹一首

經國集十四

伴成益

東平靈感木傾影志非空地隔連枝異神幽合意
同葉衰寧待雪條靡○因風遙望相思處悲哉古
墓中靡因之間元有脫字

按經國集淳和帝天長四年丁巳令滋野貞主
選自慶雲四年至天長四年之詩文然此樹入
騷人墨客之吟也久

成益文德實錄曰仁壽二年二月丁未從四位

下丹波權守伴宿禰成益卒父從五位上宇治
人成益少在太學長習文章應進士舉遂得登
科弘仁十四年為左京少進天長元年秋為式
部少丞七年春左轉為右京少進九年冬叙從
五位下承和三年夏為大藏少輔冬遷右少辨
十一年夏為左中辨十二年春叙從四位下依
法隆寺僧善愷訴訟事辨宮內共解印後出為
丹波權守境內肅然國人稱其廉潔成益為人
質直在公奉法不阿權貴卒時年六十四
貞主同年同月乙巳參議正四位下兼行宮內

卿相模守滋野朝臣貞主卒曾祖父大學頭兼
博士正五位下猶原東人該通九經號爲名儒
天平勝寶元年爲駿河守于時土出黃金東人
擇而獻之帝美其功曰勤哉臣也遂取勤臣之
義賜姓伊蘇志臣父尾張守從五位上家譯延
曆中賜姓滋野宿禰貞主身長六尺二寸稚有
度量涯岸甚高仁明大同二年奉文章生試及
第五年爲少內記六年轉爲大內記仁明天皇
初在儲之日遷東宮天長八年勅與諸儒撰集
古今文書以類相從凡有一千卷名祕府畧十

一年春捨城南宅爲伽藍名慈恩寺貞主坐禪
之餘歷游其間時人慕之十二年陳便宜十四
事多不載議亦不行嘉祥二年春兼尾張守
于時太宰府吏多不食衰弊日甚貞主上表曰
夫太宰府者西極之大壤中國之領袖也東以
長門爲關西以新羅爲拒加以九國二島郡縣
濶遠自古于今以爲重鎮夫謀事必就租發政
占古語因檢舊記大唐高麗新羅百濟任那等
悉託此境乃得入朝或緣貢獻之事或懷歸化
之心可謂諸藩之輻輳中外之開門者也因茲

有德爲師貳才良爲監典若無其人選叙辨官
式部頃年以來絕而不行近得飛語云彼吏或
擊目閉口似避時人之或忌耻貧賤爲聚斂之
吏府司國宰莫不悲傷若如此不變恐嚙臍不
及臣聞此語心神罔措雖此之飛語有何信處
而臣子之理何不預憂又聞少貳從五位下小
野朝臣恒柯筑前守從五位下朝臣今守有意
抗論無力矯枉未審虛實唯得耳劇臣不勝血
誠伏觸逆鱗言詞切直默止不省其秋爲宮內
卿三年夏授正四位下兼爲相橫守仁壽二年

春毒瘡發唇吻詔賜醫藥中使相望於路道俗
來問者日屬街巷愼咽遺戒子孫云殞斂之事
必從儉薄徂歿之後子孫齋供而已卒于慈恩
寺西書院時年六十八時人知與不知莫不流
涕愍惜貞主天性慈仁語恐傷人推進士輩隨
語汲引長女繩子心至和順進退中規仁明天
皇殊加恩幸生本康親王時子內親王柔子內
親王少女與子頗有風儀閭訓克修爲天皇所
幸生惟彥親王濃子內親王勝子內親王時人
爲外孫皇子一家繁昌乃祖慈仁之所及也

按貞主德儀宏才安富尊榮人之所慕亦宜哉唯恨捨城南宅而爲伽藍坐禪之餘歷遊其間終卒于慈恩寺也如今考曾祖父東人之事迹該通九經号爲名儒可謂一世之英豪也貞主亦若有度量爲文章生兼大小內記後昇顯官是亦繼志述事之人也然其所學者不正所見者不精遂入于浮屠朝政之暇專志于坐禪入定者非己之不明誤其生却令時人慕之且併先人所學而錯之者實可惜哉

松竹對策

江以言

新撰朗詠集懷舊

東平王之思舊里也墳上之風靡西天門山之傳新名也峽中之烟拂地全文見于下

按文粹爲弓削以言問藤原廣業對俱一條帝寬弘中人想夫昔時朝士文臣或賦之應制或述之旅懷以弔其旅魂乎然近世寥寥乎唯有宗久之歌在書中所言詩歌亦不收之紀行實可惜哉

松竹策

治部少輔從五位下弓削宿禰以言問

文粹三對策部

問松抽靈幹雲連嵩高之烟竹抱貞心風吹會稽
之綠是故德配乾位方似聖人之云爲法取震爻
自作君子之範則不審或速成而晚就其人誰人
之氏族或九疑而千尋其處何處之烟雲殷庭周
庭植棘植梓樹之變化猶暗一生一死六年十六
年之期約忽迷至于筆海之海逐日競起詞林之
花隨春交開荆嶂華池之說別時代而風羅南條
北葉之詞明根芟而露布綠楊黃柳行人去就之

意如何築山穿池道子封樹之功幾許子仙籍是
重暫降蓬萊萬里之雲高材不拘誰待橡樟七年
之日去春甚邇解冰何疑

文章得業生正六位上行近江權大掾藤原
朝臣廣業對

對竊以濛昧混沌之中一雞初生二三圓蓋方興
之後萬象遂別品彙野草山木毛髮之種相分春
雨秋風榮落之期自定於是送歲送日不改者松
林之心侵雪侵霜無移者竹叢之色秦始皇擁蓋
忽避岱嶺之雨漢高帝之正冠長創薛縣之烟柯

亭月閑雲過蔡氏之曲蘭臺日暮風舞宋玉之詞
霜毛丹項之禽翹栖綠林之夕驛騶駉之馬蹄
蹈玄池之春復有費長房之龍鱗葛波之雲永去
周景式之塵尾石門之路空閑秋風索々子野之
商絃讓音曉霜森々南山之羽枯吞舌東平王之
思舊里也墳上之風靡西天門山之傳新名也峽
中之烟掃地貞姿入夢知靈効於十八年之後勁
節含音叶律呂於十二月之中梁王之好苑囿先
備西園之庭實夏后之分貢賦永爲青州之上宜
王右軍之遊四郡鼇海之浪渺々嵇中散之締七

賢鹿巖之月蒼々蓋乃風化所及動植遍稟者也
國家俗反九首仁蒙萬心聖化風還二華之松獻
壽叡德露下細葉之竹受祥自然首文背文之鳥
長巢上林之雲羽氏翼氏之人遙就中華之日然
則速成晚就之戒方策載其人九疑千仞之談圓
丘爲其處殷庭周庭之變梓樹之詞自明一生一
死之期竹譜之文方決即驗時代可辨披齋紀而
區分南北暗知指族民而誦詠行人休止猶避幽
僻之烟道子山池誰迷斟酌之水謹對疑皇擁之問
乎

右文粹全文舉之備前參考朗詠以舊里作舊宅或作舊土掃作拂爲江以言作想夫基俊偶誤之乎

又按文選四十三劉孝標答劉沿書云冀東平之樹望咸陽而西靡蓋山之泉聞絃歌而赴節云云李善註云聖賢冢墓記曰東平思王家在東平無壘人傳云思王歸國京師後葬其冢上松栢西靡今具考之則東平王元是中華之故事儒官學生讀之發感慨楮紳朝士亦想像而賦之乎成益廣業亦似未必盡述吾國之事者

矣此古墳也往昔異邦人客死于茲而眷戀之狀有偶與夫東平王暗合者而好事者牽合之歟宗久亦信傳聞之誤而記之貽後人之惑于斯者也

洞窟堂址

在名取温泉北洞中遺文字記曰平治二年相傳往時釋慈覺開精舍時刺史不好佛一日出漁獵于河畔焉得魚尤多仍令寺僧數十輩出荷鱖魚運細鱗寺主大不樂捨寺去至羽州別開地曰寒居山立石寺是也後人呼其址而曰洞窟堂

名取御湯

在名取上流秋保村郷人曰秋保温泉相傳古昔勅封之地也故以御湯而稱之

按御湯二文字非稱本朝中華亦稱之古詩所謂有御湯搖蕩雙龍影又是胡兒簇馬看句上大和物語曰名とりの御湯をいふことを常忠の君の女のみとるをいふを此黑塚の所ととなりたる

拾遺物名

れはそらの雲のかよい路見てをかなとりの

凡ゆるは跡は四もあし

となんよみたりけるとねもりの大君ききて同えこゝろと

志不らまは浦にはあまやたはふらんたとすなとり乃みゆる時あはとあんよまとりける

按前一首載拾遺集物名部大空作化際字此字出楚詞而失而為平兼盛作拾遺集大志貌訓無覺東而為平兼盛作拾遺集大和物語共花山帝之叡作也何奚有抵悟夫如此乎哉

直下橋

入御湯板橋也立此而臨岸下則下流澹々水色染藍其狀殆駭矚經過者必倚橋欄而臨河流故曰直下橋

長館

在長袋村秋保平次郎者居館也

楯山館

同所大曲某者居之之後為平次郎所陷平次郎一平次太郎

上館

在馬場村平次太郎仲子賀澤左衛門居所也

豐後館

同所是亦左衛門孫秋保攝津永祿中所築也

秋保氏其先出于相國平清盛清盛子生資元資元生長基長基生基盛基盛始來于奥州名取郡秋保邑以秋保為氏焉十四世有彈正直盛者是乃攝津祖先也自是世居此城以武毅所知于人

也
天正十六年黃門政宗君接兵大崎深谷月鑑在軍中而通志於大崎軍散而後悞其罪欲之于最上而託義光麾下焉途經城下攝津蚤知之令從

者要之告急黃門君命置諸城中而守之十九
 年十二月七日使細谷甚兵衛者甚兵衛登時勇
取者又有星甚
 兵衛者是亦與細谷同武名命攝津害之其書曰
 屢有勇功時人謂甚兵衛所託月鑑齋可速加殺戮仍令夫甚兵衛監其首
 可矣若事不成則其罪引及親族攝津受命將刺
 之浴室而招月鑑于居第月鑑暗覺計略而辭之
 以風疾而不應焉時冬天殊寒長子長門先是脫
 上衣而藏短刀于衣中預置諸月鑑坐後退侍側
 焉月鑑視薄衣而命襲服對曰脫衣在坐後取之
 則恐失不敬乎許之於是過背後把兵而急刺之

月鑑怒而取腰刀斬長門不中其刃入于席中已
 三寸首遂墮於爐中從者聞之浴室各裸體而出
 與長門及其弟善太夫接兵攝津坐視曰小兒輩
 能勵力兄弟忽仆五人二人殺之路上畢令甚兵
 衛獻八級首于米澤黃門君大其功復賜親筆書
 曰月鑑傷害之速足以賞也子弟之勇敢頗拔
 群是亦足以痛快也前後親筆榮幸之甚併短刀
 而珍藏于家

按黃門君書中記甚兵衛事而加一夫字是尤
 所重其人而實合平日之所試以證其使者可

謂勇士之榮也長門善太夫好勇不在于人下
故大坂之役快戰死可謂不墮家聲者也

生出峯 或曰前篇太白山乃此山也

在茂庭村其山極高峻極目遼遠鄉人以爲漏出于地上者也山下有八幡神祠相傳二條帝平治元年所建也

羽山叢祠

在境野村岸上其下則湧碧潭其神乃八幡熊野稻荷有寺曰醫王山藥師寺相傳小松內大臣重盛所建也寺中藏古笈高二尺內設三架表裏朱

之

秋保瀑布

在馬場村深溪密林中直下千丈其勢也如曳練如亂絲石上碎白玉水底躍明珠山上多青松湖中交紅樹斷岸絕壁殆非凡境古人所謂千尋白浪轟蒼壁萬丈銀河舞翠巒者豈虛語乎實山中
之壯觀也

靜子古塚

在長袋村其高可六尺相傳義經之歌妓靜子之墓未詳何人設此之由

東奧嶽

在新川村封境與龍駒嶽相接焉秀衆山甲一國連天凝黛色百里透青冥西方之大嶽州人盡知其大山故名曰之東奧嶽

龍駒嶽

同所與東奧相並山上無樹唯生茄草鄉人曰山中有龍駒常出而食草往々有見之者仍名其山

岳

磐神山

在新川西南龍駒山南蒼岨相峙翠岩相並上有

青松紅樹下有屈曲潺湲其山勢也層々峨々數峯連亘凡二千餘町濕雲常生于足下冥霧長鎖于面前空洞幽壑擁斷岸峭壁橫峯遶長流渾與人境大異也相傳往古有山人不詳產何地焉兄曰磐次郎弟曰磐三郎容貌魁岸性好田獵常在山澤疾走輕捷跋涉峯巒蹊澗恰若飛仙羽客鄉俗以爲地仙之儔焉未詳其所終矣後人祀之爲山神仍稱栖遲山岳曰磐神山也其中西曰陽磐神東曰陰磐神山頂曰櫛形嶺後來以其遺像置于最上立石寺洞中以祭之

鄉談曰或天陰雨暗四顧寥々有坎々伐木者其聲已數百人談笑震林木而止明旦求之其地則聊無見之者矣或偶然遇異客于幽邃之間忽然失所在而不知其之處如此奇怪往々有之蓋魑魅罔兩之類乎

又府城西大梅寺有高山屈曲十八町相傳是亦磐次郎遊息之地也山上安其像兩地俱獵人之狀而持弓矢者也是山亦稱磐山

指賀莊和名集亦舉之

風土記殘篇曰公穀六百七十二束三毛田假粟

五百六十五束三字田貢駿馬栗梅櫻未詳其地或曰今志賀村是也

岩窟山

在同村曰岩窟山石龍寺相傳清和帝貞觀二年僧慈覺所開善遊像自所作脇持日光月光運慶作又有丈六彌陀堂後有經塚其傍有一山稱山王峯下有不動瀑布

玉浦

岩沼以東二倉海濱曰藤曾根是往時之玉浦也阿武隈河流經其南河南是亘理郡荒濱地是乃

商船之所輻湊設倉廩于此而納公穀有吏而司之河北乃名取郡蒲崎也是亦商船着岸之津也河流過中間而入于海左右海濱共有便廻船之地也玉浦渾河畔之摠名

玉崎王前不詳其地崎前同訓蓋同所乎

去武隈館南數百町在南長谷村中曰之玉崎

玉島

增田驛南河流曰之玉川去武隈西北六七里水源出笠島是亦誤玉島川名者乎

風土記曰出鱒鮭鮎等自阿武隈河入此水

玉島神社已下出風土記未詳其地

圭田五十九束三字田所祭下照比咩也天武天皇三年甲戌三月始奉圭田行神禮

玉前莊

公穀三百五十二束假粟二百八十六丸貢紅花栗梨楊梅等

井上鄉

公穀二百六十七束假粟二百二十五丸貢杉柏栗及鸛鶴鷓鴣等

九品寺

寄田四十八束三毛田道眼和尚結夏之丈室也
乘圓寺

寄田二十五束三毛田行基信宿地也
多賀神社

圭田五十八束二字田所祭伊弉諾尊也雄畧二
年始奉圭田行神禮式祭

